

送電鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

江田川遺跡3・川向山添遺跡2・横谷遺跡2

江田川遺跡3・川向山添遺跡2・横谷遺跡2

二〇二一年（令和四年）三月

2022年（令和4年）3月
四日市市教育委員会



江田川遺跡調査区全景(南から)



江田川遺跡 火葬穴 S F73(北から)



江田川遺跡 土師器焼成坑 S F76(南から)

巻頭図版2



川向山添遺跡調査区全景(南東から)



横谷遺跡調査区全景(南西から)

例言

1 本書は、送電鉄塔建設にかかる江田川遺跡第3次調査・川向山添遺跡第3次調査・横谷遺跡第2次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 調査にかかる費用は、中部電力パワーグリッド株式会社の負担による。

3 現地調査および整理作業は、下記の体制で行った。

・調査主体 四日市市教育委員会

教育長

葛西 文雄(～令和3年7月)、廣瀬 琢也(令和3年8月～)

副教育長

栗田 さち子(平成29年度)、松岡 俊樹(平成30年度～)

教育監

上浦 健治(平成29年度)、廣瀬 琢也(平成30・31年度)

高橋 啓一(令和2年度)、内村 信彦(令和3年度)

中村 竹雅(平成29・30年度)

理事

竹雅(平成29・30年度)

・調査担当 四日市市教育委員会 社会教育課(平成31年度以降は社会教育・文化財課)

社会教育課長

川尻 秀納(～平成31年度)、伊藤 早百合(令和2年度～)

副事務長補佐

葛山 拓也

主幹(令和3年度課付主幹)

清水 政宏

嘱託(令和2年度以降は会計年度任用職員)山本 邦也、川崎 志乃

荒木 昌俊(平成30年度)、片岡 博(平成31年度～)

室内整理員

北野節子、鈴木美和子

4 樹種調査及び金属製品の保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託した。

5 報告書の作成業務は令和2・3年度に四日市市教育委員会社会教育・文化財課が行い、執筆・編集は山本達也・川崎志乃が行っている。

6 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第VI底標系を基準とし、方位の表示は底標北を用いた。

7 本書に使用した遺構表示記号は、下記のとおりである。

S B:掘立柱建物 SK:土坑 S F:火葬穴・土器焼成坑 SD:溝

8 本書で表記する色調は、農林水産省水産技術会事務局及び財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(2002年版)に準拠した。

9 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、四日市市教育委員会が保管している。

本文目次

I 調査に至る経緯	9
1. 調査に至る経緯	1
2. 文化財保護法等にかかる諸手続き	1
II 位置と環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
III 調査の成果	9
1. 調査の方法	9
2. 江田川遺跡(第3次)の遺構と遺物	9
3. 川向山添遺跡(第3次)の遺構と遺物	17
4. 横谷遺跡(第2次)の遺構と遺物	17
IV 結語	22
四日市市江田川遺跡出土炭化材の樹種調査結果	25

挿図目次

第1図 送電鉄塔位置図	2
第2図 遺跡位置図	6
第3図 江田川遺跡調査区平面図	10
第4図 江田川遺跡調査区西壁・SD72・SD77土層断面図、D2P1出土状況図	11
第5図 江田川遺跡SF73出土状況図・土層断面図	12
第6図 江田川遺跡SF76出土状況図	14
第7図 江田川遺跡SF76平面図・断面図	15
第8図 江田川遺跡SB78平面図・断面図	16
第9図 川向山添遺跡調査区平面図・断面図	18
第10図 横谷遺跡調査区平面図	19
第11図 横谷遺跡土層断面図①	20
第12図 横谷遺跡土層断面図②	21
第13図 横谷遺跡SK41・SK42・Pit平面・断面図	23
第14図 遺物実測図	24

挿表目次

第1表 送電鉄塔建設事業に伴う埋蔵文化財保護対応一覧表	23
第2表 遺物観察表	23

写真図版

卷頭図版 江田川遺跡調査区全景	図版2 江田川遺跡SF76・遺物出土状況
江田川遺跡火葬穴SF73・江田川遺跡土器 焼成坑SF76	図版3 江田川遺跡SB78・SD72
川向山添遺跡調査区全景	図版4 川向山添遺跡調査区全景・SD71・SB64
横谷遺跡調査区全景	図版5 横谷遺跡調査区全景・SK41
図版1 江田川遺跡SF73完掘状況・遺物出土状況	図版6 出土遺物

I 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

送電鉄塔建設事業の計画は、平成28年9月15日・平成29年3月16日・平成30年8月3日に埋蔵文化財の照会があり、一部の鉄塔が遺跡の範囲内にあったため、四日市市教育委員会と中部電力株式会社(平成31年度：中部電力ネットワークカンパニー、令和元年度～：中部電力パワーグリッド株式会社)との間で埋蔵文化財の保護措置が協議されることとなった。

協議の結果、事業が広範な範囲にわたるため、複数の遺跡で保護措置の対応が必要であることから、各鉄塔の建設設計図に合わせて、個別に対応することになった。(第1表参照)

なかでも、江田川遺跡・川向山添遺跡・横谷遺跡内の事業計画は、一般国道1号北勢バイパス(以下、北勢バイパス)建設に伴う発掘調査を実施している隣接地であったことから、遺構・遺物が検出されることが想定されたため、設計変更協議を重ね、仮設道設置や表土処理等において対応していただいた。

以下、発掘調査に至った江田川遺跡・横谷遺跡・川向山添遺跡について、経緯を記載する。

【江田川遺跡】

江田川遺跡は、四日市市西坂部町山添に所在する。遺跡内では過去に北勢バイパス建設に伴う発掘調査を実施しており、今回行った第3次調査は中部電力株式会社(中部電力パワーグリッド株式会社)の送電鉄塔建設(新設N0.22)に伴う事前調査として実施した。

協議の結果、平成31年3月25日に試掘調査を行い、遺構・遺物を確認した。その結果を受け、再度協議の結果、発掘調査を行うこととなり、令和元年5月9日より2019年7月まで調査を実施した。

【川向山添遺跡】

川向山添遺跡は、四日市市西坂部町字山添、御館に所在する。遺跡内では過去に北勢バイパス建設に伴う発掘調査を実施しており、今回行った第3次調査は中部電力パワーグリッド株式会社の送電鉄塔建設に伴う事前調査として実施した。

協議の結果、事業地は平成30年度に実施した北勢バイパス建設に伴う発掘調査(第2次調査)時に、送電中の

既設鉄塔(既設N0.21)であったため、鉄塔敷地外においても発掘調査対象から控えざるをえなかった経緯があり、隣接地において多数の遺構が確認されているため発掘調査を行うこととなり、令和2年5月25日より6月3日まで調査を実施した。

【横谷遺跡】

横谷遺跡は、四日市市西坂部町字落原に所在する。遺跡内では過去に北勢バイパス建設に伴う発掘調査を実施しており、今回行った第2次調査は中部電力株式会社(中部電力パワーグリッド株式会社)の送電鉄塔建設(新設N0.23)に伴う事前調査として実施した。

協議の結果、平成31年3月26日に試掘調査を行い、遺構・遺物を確認した。その結果を受け、再度協議の結果、発掘調査を行うこととなり、令和元年7月16日より8月6日まで調査を実施した。

2. 文化財保護法等にかかる諸手続き

文化財保護法に係る諸手続きは、以下により行っていいる。

江田川遺跡(新設N0.22)

【法93条】 平成30年10月17日付、社会第264号

【法93条2】 平成30年10月29日付、(県教育長通知)社会第63号-3(事業者兼)

【試掘調査】

- ・協定書・協議書締結 平成30年12月10日(中部電力ネットワークカンパニー 四日市電力センター 所長 北島慎也・四日市市教育長 萩西文雄)

- ・調査実施 平成31年3月25日

- ・結果報告 平成31年4月8日付、社文第8号(事業者・県教育長宛)

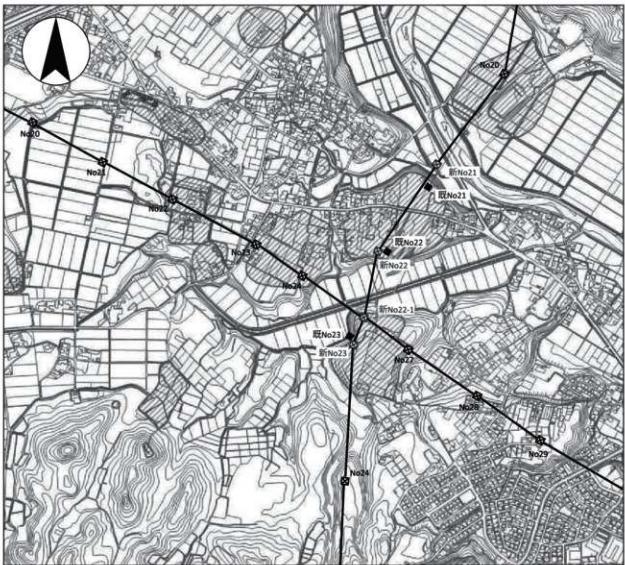
【法99条】

令和元年5月9日付け、社文第71号(県教育長宛)

【発掘調査】

- ・協議書締結 平成31年4月18日(中部電力ネットワークカンパニー 四日市電力センター 所長 北島慎也・四日市市教育長 萩西文雄)

- ・変更協議書締結 令和元年6月21日(中部電力ネットワークカンパニー 四日市電力センター 所長 北島



第1図 送電鉄塔位置図

番号	道跡名	鉄道路線名	鉄塔(物別番号) 新設 既設	法93条による夷面図提出の提出 平成30年10月17日付 社会第262号 令和2年6月7日付 社文第144号	対応	面積	工事概要
1	川原宮道跡		No. 20	平成30年10月17日付 社会第262号 令和2年6月7日付 社文第144号	信重工事	653.04m ²	工事用い基礎巻切土
2	川向山道跡		No. 21	平成30年10月17日付 社会第263号 令和2年6月7日付 社文第145号	免査調査	169.7m ²	撤去
3	江田川道跡		No. 22	平成30年10月17日付 社会第264号 令和2年6月7日付 社文第146号	試掘調査 免査調査	206m ²	新設
4			No. 22-1	平成30年10月17日付 社会第265号 令和2年6月7日付 社文第147号	工事立会	2,402.94m ²	撤去
5	横谷道跡		No. 22-2	対象外	信重工事	3,148.49m ²	新設
6			No. 23	平成30年10月17日付 社会第266号 令和2年6月7日付 社文第148号	試掘調査 免査調査	209m ²	新設
7			No. 23	平成30年10月17日付 社会第267号 令和2年6月7日付 社文第149号	工事立会	3,548.43m ²	撤去
8			No. 27	平成30年10月17日付 社会第270号 令和2年6月7日付 社文第152号	信重工事	796.21m ²	工事用い基礎巻切土なし
9			No. 24	平成30年10月17日付 社会第269号 令和2年6月7日付 社文第151号	信重工事	102.42m ²	工事用い基礎巻切土なし
10	落河原道跡						

第1表 送電鉄塔建設事業に伴う埋蔵文化財保護対応一覧表

慎也・四日市市教育長 萩西文雄)

【法99条】

令和元年7月16日付け、社文第138号(県教育長宛)

【免査調査】

- ・協議書締結 平成31年4月18日(中部電力ネットワークカンパニー 四日市電力センター 所長 北島慎也・四日市市教育長 萩西文雄)
- ・結果報告 令和元年8月28日付、社文第138号-3(事業者・県教育長宛)
- ・免査届 令和2年4月8日付、社文第16号(四日市北警察署長宛)
- ・埋蔵文化財認定 令和2年4月16日付、教委第12-4501号(県教育長通知)

(川崎)

川向山遺跡(既設No. 21)

【法93条】 平成30年10月17日付、社会第263号

【法93条2】 平成30年10月29日付、(県教育長通知)社会第263号-2(事業者宛)

【協定書・協議書の締結】

- ・協定書締結 平成30年12月10日(中部電力ネットワークカンパニー 四日市電力センター 所長 北島慎也・四日市市教育長 萩西文雄)
- ・協議書締結 令和元年6月21日(中部電力ネットワークカンパニー 四日市電力センター 所長 北島慎也・四日市市教育長 萩西文雄)

【法99条】

令和2年5月25日付け、社文第75号(県教育長宛)

・調査実施 令和2年5月25日~令和2年6月3日

・結果報告 令和2年6月18日付、社文第75号-3(事業者・県教育長宛)

・免査届 令和2年6月19日付、社文第75号-4(四日市北警察署長宛)

・埋蔵文化財認定 令和2年6月30日付、教委第12-3424号(県教育長通知)

横谷遺跡(既設No. 23)

【法93条】 平成30年10月17日付、社会第266号

【法93条2】 平成30年10月29日付、(県教育長通知)社会第263号-2(事業者宛)

【試掘調査】

- ・協定書・協議書締結 平成30年12月10日(中部電力ネットワークカンパニー 四日市電力センター 所長 北島慎也・四日市市教育長 萩西文雄)
- ・調査実施 平成31年3月26日

- ・結果報告 平成31年4月8日付、社文第9号(事業者・県教育長宛)

II 位置と環境

川向山系遺跡(1)・江田川遺跡(2)・横谷遺跡(3)は、周辺の地理的・歴史的な環境を涵概してみたい。文章中の番号は第2回の番号に対応している。

1. 地理的環境

川向山系遺跡(1)と江田川遺跡(2)は、四日市市西部の西坂部町に所在し、海蔵川と江田川に挟まれた御館台地の東端にある遺跡である。台地の中央を東西に横切る県道田原・四日市線の北側が川向山系遺跡、南側が江田川系遺跡となっているが、既往の調査から古墳時代後期を中心とする一連の遺跡であると考えられている。横谷遺跡(3)も、同じく西坂部町に所在し、江田川右岸の丘陵北端に立地する繩文時代及び古墳時代の遺跡である。

海蔵川や江田川をはじめ、市域を流れる河川は鈴鹿山脈に源を発し、東流して伊勢湾に注ぐ。

市内では、東部の海岸平野を東海道が南北に通っている。途中の水谷追分で参宮道は分歧し、伊勢神宮へ向かう。伊勢湾に面する港からは、対岸の三河や美濃に通じ、外海へ出て東国とも交易が行われた。鈴鹿山脈の八風越えや千種越えによって、近江を通る東山道と繋がり、京と東国を結ぶ交通の要衝となっている。

2. 歴史的環境

旧石器時代

四日市市周囲では、ナイフ型石器の出土する遺跡がいくつか知られている。内部川・鎌谷川流域に属する内谷B遺跡や宮蔵遺跡などの市域南部のグループと、朝明川流域の久留倍遺跡(4)及び、削器・剥片のみの発見があるが当時代に属する可能性がある野呂田遺跡(5)などを含む市域北部のグループである。川原宮遺跡近傍では旧石器の出土は確認されていない。

縄文時代

繩文時代草創期に属するものとしては東北山A遺跡(6)など、有尖頭器が出土した遺跡が鈴鹿山脈北端地の台地上で多数確認されている。早期の遺跡は、中野山遺跡(7)で縄文早中期の堆積付灰坑が多数検出されたほか、内部川流域の一色山遺跡で押型文土器が出土している。このほかに発掘調査で構造が確認されている例を挙げると、東日野遺跡(8)や小牧山遺跡(9)で竪穴住居が、西ヶ庄遺跡(10)で縄文中期後葉の土坑と

その中から深溝が、土丹遺跡(12)や桑名市の志知南浦遺跡(11)やといった沖積地で繩文晚期の突堤文土器が、伊坂遺跡(13)で狩猟用の隨し穴が検出されており、種々に様相が明らかになりつつある。

弥生時代

弥生時代になると、まず前期には海蔵川と三瀧川に挟まれた生桑丘陵上に、いずれも多重環濠をもつ大谷遺跡(14)、永井遺跡(15)などの集落が営まれる。中期ないし後期に入ると大谷遺跡、永井遺跡も継続して営まれるが、そのほかの地域でも遺跡数が飛躍的に増加し、海岸部から丘陵部に広く分布が見られるようになる。

久留倍遺跡(4)では中期から後期にかけての竪穴住居のほか、方形周溝墓が確認され、道路からは多くの土器・木製品が出土した。特に後期になると構造が飛躍的に増加する。これと時期を同じくして、久留倍遺跡南西の丘陵上に立地する山奥遺跡(16)で県下に数多くの大規模な集落が営まれる。土器模造鏡や多數の鉄製品などの遺物があり、注目される。このほか中野山遺跡では集落が確認されている。葦上遺跡(17)では中期後葉に大規模な集落が形成される。後期になると葦上遺跡と西侧に谷を隔てた西ヶ庄遺跡(10)が中心的集落となる。一方で東部の丘陵頂部に営まれた金森遺跡(18)では環濠を持つ高地性集落が営まれ、山村遺跡(19)でも環濠が確認されている。低地部では、辻子遺跡(20)で中期後葉から後期の集落及び水田が確認されている。墓地としては、久留倍遺跡及びこれに隣接する大矢知山遺跡(21)で方形周溝墓が検出されたほか、山田遺跡でも方形周溝墓が20基検出されている。他に葦上遺跡や広永城跡(22)、間ノ口遺跡(23)でも方形周溝墓が確認されている。この他、金森遺跡では縦杉文を有する銅鐸被片が、伊坂遺跡では江戸時代に扁平錐式姿攢文銅鐸が出土している。

南方の海蔵川北岸の上野遺跡(24)でも中期後葉の集落と方形周溝墓が確認されている。

川向山系遺跡(1)近傍では横谷遺跡(3)が弥生時代の遺跡として登録されているが、平成29年度の発掘調査では当該期の遺物は出土していない。

古墳時代

古墳時代前期に入ると、久留倍遺跡(4)や上野遺跡

(24)でまとまった集落が見られるようになる。また、海岸に近い凌福城跡(25)の下層で確認された里之内遺跡(26)では人字状口縁台付甕が出土しており、この時期に海岸低地への進出が始まったものと見られる。周辺の前期古墳は、内行花文鏡や車輪石・勾玉などが出土した志氏神社古墳(27)があるほか、員弁川系では三角縁神獸鏡が出土した可能性がある桑名市の高塚山古墳が見られる程度である。しかし、葦上遺跡(17)では滑石製合口型石製品の蓋が出土し、伊坂遺跡(13)では勾玉や管状が出土していることから、他にも消滅した古墳が存在した可能性もある。中期古墳としては、方墳を主体とする広古墳群(28)や、その東側にあって同じく方墳の可能性が指摘されている浄ヶ坊古墳群(29)がある。後期に入ると、遺跡数が爆発的に増加する。中野山遺跡では前期から続いて集落が営まれる。重坂丘陵東麓地域では、一旦消滅していた山奥遺跡で再び集落が営まれるようになる。海蔵川流域では、江田川遺跡(2)のほか、川向山系遺跡(1)、御館野遺跡(30)でも後期の集落が確認されている。

古墳は、特に7世紀以降に大規模な群集墳が多く築造される。筆ヶ崎古墳群(31)や八幡古墳(32)、御池古墳群(33)のように横穴式石室を主体とする古墳がある一方、死人谷横穴墓群(34)や金屋横穴墓群(35)、朝日町の広永横穴墓群(36)のように横穴墓も多数見られ、その導入の過程が注目される。また、北山C遺跡(37)では多数の方墳からなる大規模な群集墳が確認されている。このほか、所轄時期は明確ではないが、鈴木敏雄氏の記録によれば御池古墳群東側の丘陵上に「大塚」と称される前方後圓墳が1基存在したとされる。

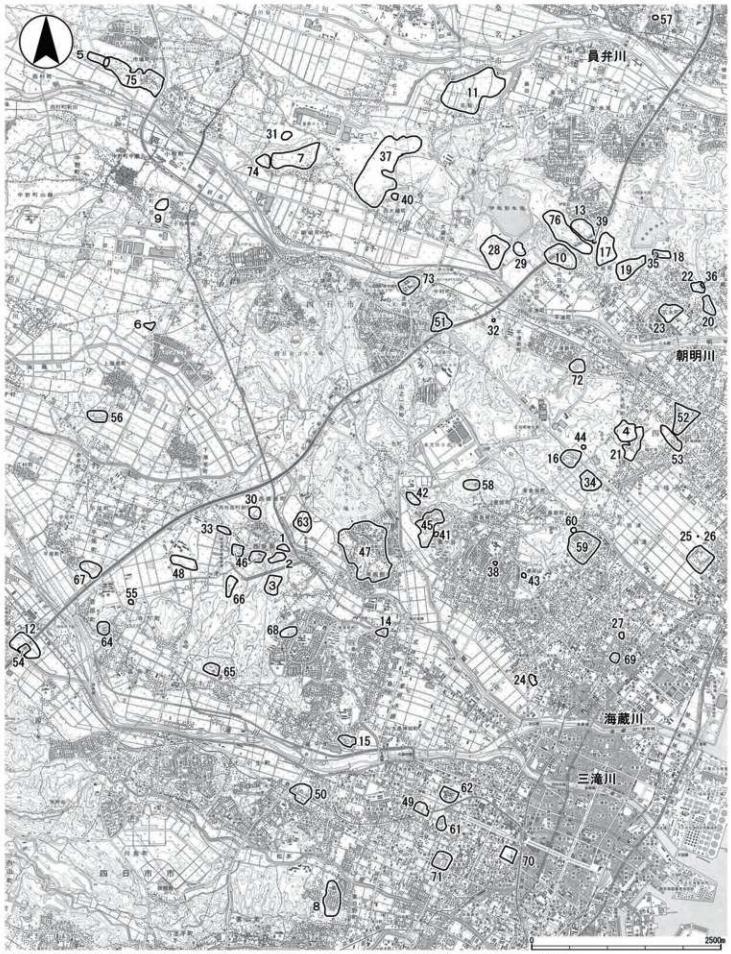
生産遺跡としては垂坂丘陵や朝日丘陵周辺に、まず5世紀後半に小桙大谷古窯跡(38)が築かれ、その後、伊坂窯跡(39)、北ノ山古窯跡(40)、西ヶ谷古窯跡(41)、名戸谷古窯跡(42)、垂坂古窯跡(43)、猪谷窯跡(44)など古墳時代中期から奈良時代にかけて須恵器窯が築かれた。西ヶ谷古窯跡に隣接する西ヶ谷遺跡(45)は、出土遺物からその生産活動に関わっていた集落と考えられる。土師器焼成については、山奥遺跡や西ヶ谷遺跡、落河原遺跡(46)、久留倍遺跡で確認されている。

飛鳥時代

横谷遺跡の所在する坂部町は、「『倭名類聚鈔(和名抄)』に見える、古代三重郡の刑部郷に相当すると考えられている。刑部郷内に属すると考えられる当該期の主要遺跡は、貝野遺跡(47)、江田川遺跡、落河原遺跡、上ヶ谷遺跡(48)などがある。特に貝野遺跡では、やや整然さを欠くが、古代の掘立柱建物が多数検出されているほか、暗文土器がまとめて出土しており、遺跡の規模から考えても郷内の中心的な集落であったと考えられる。落河原遺跡では石器が出土しており、官人の存在をうかがわせる。

また、近隣の朝明川流域を中心とする古代朝明郡に関わると思われる発掘調査成果が近年相次いでおり、今後の研究に大きな期待が持たれる。久留倍遺跡では東南の正殿や八脚門や政府の施設、大規模な東西棟の掘立柱建物等が検出された。また構で方形に区画された内側に整然と並ぶ柱建物が確認され、朝明郡の正倉院跡と推測されている。一方、西ヶ谷遺跡で確認された、奈良時代に計画的に配置された大型の掘立柱建物群は、官衙に関連する可能性が高い建物群である。谷を隔てた丘陵上に広がる葦上遺跡では、西ヶ谷遺跡より古い掘立柱建物群が見つかっている。このほか、宮の西遺跡(49)では石器や木簡が、落河原遺跡や前山遺跡(50)で石器が出土している。対して、山村遺跡、中村遺跡(51)、貝野遺跡などはこの時期の一般的な集落と思われる遺跡である。久留倍遺跡東方の下之宮遺跡(52)、下之宮南遺跡(53)は、低地部の集落遺跡と考えられる。中野山遺跡や筆ヶ崎古墳群の周辺では、多くの建物跡が見つかり、筆ヶ崎古墳群では鉄器加工に関係する遺構や遺物が検出されていることから、当地の古代郷名である大鎌郷との関係が考えられる。

古代三重郡で確認されている古代の寺院としては、智積町の智積麻寺(54)がある。昭和41年の発掘調査で金堂、講堂、僧坊が確認されている。瓦は、川原寺式のものが含まれ。寺方町の北浦古窯跡群(55)から供給を受けたと考えられている。岡山古窯跡群(56)は、古墳時代後期から営まれている窯であるが、奈良時代には視認なし官衙や寺院の周りに考えられる器種を焼成している。さらに広域に日を回すと、塔心礎から唐三彩の蓋と motifs 舍利容器が出土する桑名市の額田庵寺(57)では飛鳥川原寺と同様の軒丸瓦が出土している。西ヶ谷遺跡や伊坂遺跡ではまとまった量の瓦が出土し、前者は小規模な堂の存在が、後者は瓦窯の存在が



想定される。そのほか、上ヶ谷遺跡では布目瓦が集中して散布する一角があり、その性格が注目される。

平安時代

平安前期には久留倍遺跡で引き継ぎ正倉が建てられている。近接する大矢知山遺跡は豊富な灰釉陶器などの出土遺物から有力者の居館か寺院関連の遺跡とみられる。当時、当地域に大きな影響を及ぼしたと思われるのは、10世紀前葉に建立され現在も信仰を集める重坂山観音寺(58)である。大膳寺跡(59)もその寺宇の一つと伝わり、発掘調査で土馬や大量の瓦が出土しているが、遺物の時期は観音寺建立より古い。この近隣にある大谷瓦窯跡(60)は、大膳寺跡へ瓦を供給した瓦窯である。上野遺跡では人名の墨書灰釉陶器が出土している。

中世

律令的支配体制の崩壊に伴い、北勢地方の員弁郡・三重郡・朝明郡の三郡は相次いで伊勢神宮に寄進されて神郡となり、神宮の莊園である御蔭・御厨・納所がたてられた。これらの莊園と関わる考え方される遺跡としては、宮ノ西遺跡がある。これは古から続く遺跡で、出土した木簡から古代栄田郡の一部であることが知られるが、墨書き器をはじめとする中世の遺物も豊富に出土しており、近隣の芝田遺跡(61)・小判田遺跡(62)などとともに当地周辺に比定される飯倉御厨の一角と考えられる。辻子遺跡は、多数の墨書き器や灰釉陶器などの出土遺物から、古代末期に朝明郡が神宮に寄進された後にこの周辺に所在した弘永御厨の中心地と推定されている。久留倍遺跡では中世の遺構・遺物も多く、据立柱建物、井戸、溝、区画壁を伴う塚墓・火葬墓等を確認した。菟上遺跡では中世前期の集落と中世後期の大火葬墓群が見つかった。上野遺跡は区画溝と据立柱建物が確認され、貴重な中世の集落資料となっている。川原官道跡(63)では、低地部における小集落とともに地震痕跡も確認されている。

城館について見ると、本遺跡周辺には1204年の三日平氏の乱に被災すると見られる高角城跡(64)・曾井城跡(65)があるが、いずれも明確な遺構は見られない。

ほかに、百合谷城跡(66)・平尾城跡(67)・坂籠城跡(68)・羽津城跡(69)がある。このうち、平尾城跡は1933年に発掘調査が行われている。さらに平野部に目を向けると茂福城跡(25)・浜田城跡(70)・赤堀城跡(71)がある。これらは地割や現存遺構から繩張りの復

元が読みられており、赤堀城跡は現在まで5次にわたる発掘調査が行われ、土壘などの遺構が検出されている。朝明川流域では、大矢知城跡(72)・萱生城跡(73)・北山城跡(74)・市場城跡(75)などがあり、中でも伊加城跡(76)は、近年の発掘調査で防衛性の高い繩張りや礎石を有する巨大な櫓門が検出され、16世紀代の当地域における城づくりの最高到達点と評価されている。

【主要参考文献】

●四日市市

『四日市市史 第一巻 史料編 自然』1990、『考古I』1988、『考古II』1993、『古代・中世』1991

●四日市市教育委員会

『大谷遺跡発掘調査報告 A地区、B地区』1966、
『大谷遺跡発掘調査報告 II-C地区の遺構』1976、
『大谷遺跡発掘調査報告 III-C地区的遺物』1977
『西ヶ谷遺跡発掘調査報告 D地区-』1972
『永井遺跡発掘調査報告』1973

『四日市の後期古墳』1973

『大膳寺跡』1978・1979・1980・1981・1982

『西ヶ谷遺跡3』2002、『西ヶ谷遺跡4』2002、
『西ヶ谷遺跡5』2005
『大矢知山遺跡』2002

『山奥遺跡1』2003、『山奥遺跡2』2004

『久留宿遺跡5』2013、『久留宿遺跡6』2013

『川原宮遺跡』2015

『江田川遺跡』2016

『横谷遺跡』2021

●四日市市遺跡調査会

『上野遺跡』1991、『上野遺跡2』1992

『西ヶ谷遺跡』1996

●朝日町教育委員会

『繩文座跡発掘調査報告』1988

●朝日町

『みえあさり文化財マップ』1999

●三重県文化財連盟

『東名阪道跡埋蔵文化財調査報告』1970

●三重県埋蔵文化財センター

『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』

2002

『伊坂城跡発掘調査報告』2003、『伊坂遺跡発掘調査報告』2004

『山村遺跡(第2次)発掘調査報告』2004

『辻子遺跡発掘調査報告』2004

『間ノ田遺跡・辻子遺跡(第4次)発掘調査報告』2005

『菟上遺跡発掘調査報告』2005

『広永横穴墓群・広永1号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』2006

『西ヶ庄遺跡(第3・4次)発掘調査報告』2006

『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008

『中野山遺跡(第2・3・6・7次)発掘調査報告』

2016

『中野山遺跡(第4・5・8~13次)発掘調査報告』

2022

『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第4・5・7次)発掘調査報告』2019

『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第2・3・6・7次)発掘調査報告』2021

『北山C遺跡(第2~7次)・西山古墳群 発掘調査報告』2020

『尼林遺跡・北山城跡(第2~4次)発掘調査報告』2022

III 調査の成果

1. 調査の方法

(1) 調査区の設定

調査区の設定にあたり、鉄塔を新設する江田川遺跡・横谷遺跡については計画図に基づき、4箇所の鉄塔脚部を通るよう、2本ずつ幅1m、長さ14m前後の試掘坑を設定し、埋蔵文化財の有無を調査した。その結果、遺構・遺物が確認されたことから、鉄塔脚部を設置する4箇所の掘削部を包括するようにほぼ正方形に調査区を設定した。ただし、江田川遺跡の調査区は隣地境界に近接している関係で東側の掘削箇所をやや減じた。

既設鉄塔の撤去工事を行う川向山浜遺跡は、平成30年度までに行われた北勢バイパス建設に係る発掘調査時に、送電のため鉄塔及びその周囲の部分の調査を控えざるを得なかった経緯があり、ここが正方形の島状に未調査地として残されていた状況であった。この調査で一部の遺構が鉄塔敷地内に及んでいることが明らかとなつたため、試掘は行わず残存部分を全て調査対象区域とした。

(2) 小地区の設定

調査区の設定後、調査区全体にわたって調査区の間に合わせた任意の4m四方の小区を設定した。各小区には、北から南へ向かってAから順にアルファベットを、西から東へ向かって1から順に数字を付与し、このアルファベットと数字の組み合わせにより各小区を示した。遺構検出段階における遺物の出土位置の記録は、小地区ごとに実施した。

(3) 掘削

現地調査での掘削作業については、まず表土を重機で除去した。その後、人力により包含層掘削と遺構検出作業を行い、検出した各遺構をさらに人力で掘削した。土砂の搬出はベルトコンベア等を使用せず全て人力により行った。

(4) 遺構番号の付与

遺構番号は、それぞれの遺跡の前回調査からの連番とし、表記時に番号の前にS-B、SDなど遺構の種類ごとの略称を付した。ピットは、小地区ごとに地区名を冠した通し番号を付した。

(5) 写真撮影

遺構写真撮影は、主として4×5判及びプローニー版のポジフィルム・モノクロフィルムで行い、補助的に35mm版ボジフィルム・モノクロフィルム及びデジタル一眼レフカメラを使用した。

(6) 遺構実測

遺構実測は、掘削と写真撮影が完了したのち、国土座標に合わせた3m四方のグリッドを設定のうえで基準ピッタリ打ち、手計測により実測を行った。

2. 江田川遺跡(第3次)の遺構と遺物

(1) 基本層位

基本層位は、黒褐色の表土下に黒褐色の包含層があり、地山はやや粘性のある褐色土である。表土と包含層の色調は近似しており、表土直下が地山となっている部分もあった。地表面から検出面までの深度は、概ね0.5m前後である。

(2) 遺構

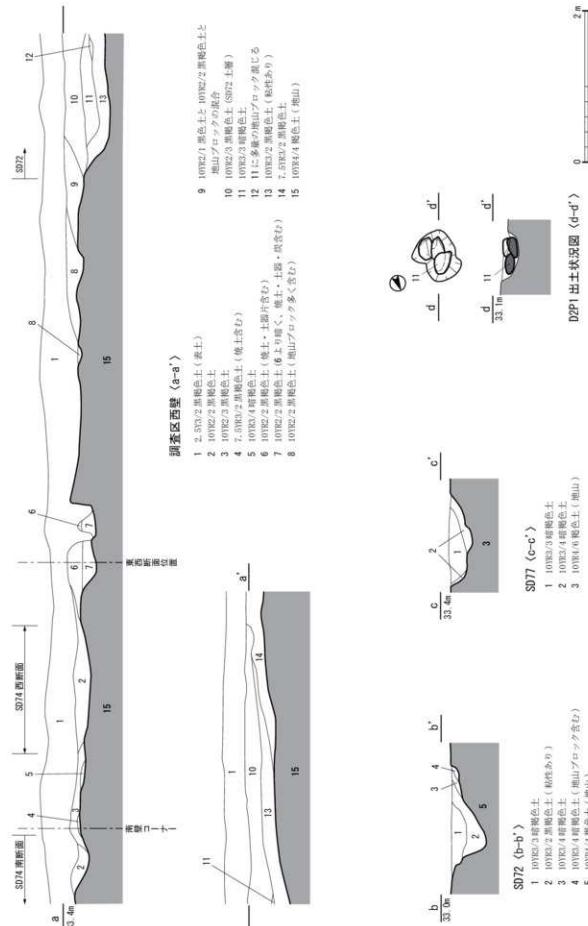
検出した遺構は、火葬穴・土師器焼成坑・掘立柱跡・溝・ピットである。第1次調査区で多数検出した堅穴住居は見られなかつた。

a. 火葬穴

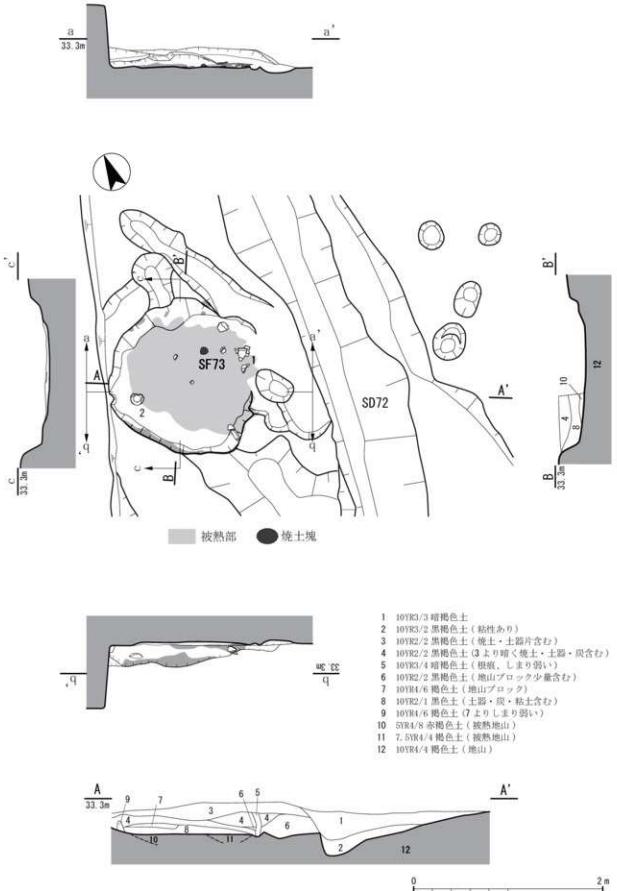
S F73(第5図) 調査区西側に位置する円形土坑である。東西1.7m、南北1.7mで、検出面からの深さは0.3mである。検出段階で堆土が見られたため、当初は後述する土師器焼成坑のS F76と同様の構造と考えて掘削を行ひ、中央付近の床面で検出した堆土は覆土の一部と考えていた。しかし焼成に失敗した層状に剥離したりした土師器は出土せず、木炭の残片も見られなかつた。床面は掘削が困難なほど硬く焼け締り、側壁も広く被熱部が認められたことからS F76と比較しても高温の火が扱われたことが分かる。西側では床面からやや浮いた位置ではぼ完形の土師器杯が1点出土した。以上のような状況から火葬穴用いられた土坑の可能性が考えられる。出土遺物は、土師器鍋、杯のほか、混入遺物として須恵器高杯がある。特に土師器杯は強い二次的な被熱が見られることから、火葬時に全体と共に火にかけられたものであろう。床面付近は特に注意深く掘削した。火葬骨等は確認されなかつた。時期は平安時代と考えられる。



第3図 江田川遺跡調査区平面図(1:100)



第4図 江田川遺跡調査区西壁・SD72・SD77土層断面図、D2P1出土状況図(1:50)



第5図 江田川遺跡 S F 73出土状況図・土壌断面図(1:40)

b. 土師器焼成坑

S F 76(第6・7図) 調査区の中央部東寄りで検出した土師器焼成坑である。東西1.8m、南北3.0m南に頂点を置く二等辺三角形で、検出面からの深さは0.3mである。中央や北西寄りにはS B 78の柱穴が掘り込まれている。床面は、頂点から短辺側に向かって若干の傾斜があり、掘削した加工面の上に0.04~0.06m程度の置き土を行って整えた上で焼成を行っている。側壁は済曲しながら立ち上がっており、上部が垂直になっていたと推定される。被熱は側壁・床面とも土坑の北西側が強く、他はあまり被熱の痕跡は顕著に見られなかった。また、壁の立ち上がり部も被熱は弱い。

焼成に用いたと考えられる薪材は、土坑の側壁北西隅付近と南東付近、中央南寄り付近で頸著に認められ直徑3cm程度の薪材が土坑の主軸と平行に置かれていたようである。樹種は、同定を行った3点全てがブナ科シイ属であった(25頁参照)。

出土遺物は土師器甕がある。小型の甕と長胴甕の2種が認められるが調製技法等は共通している。他の器種は出土していない。土器の表面は、裏表共に焼成時に端部が薄く剥離した箇所が認められるものが多く、層状に割れた破片も多量に見られる。出土位置は平面的には土坑の最も0.2~0.4m離れた中央付近にまとまる傾向が見られ、大破片は床面の被熱も強い北西隅近くに多い。垂直レベルで分布を見ると、床面の傾斜と同じく、土坑の頂点すなわち南側から奥壁に向かって傾斜し、奥壁から0.8m附近が最も深くなる。この分布の底面は、最終焼成時の機能面とみなしてよいであろう。

時期は土師器甕の形態から7世紀前半と考えられ、江田川遺跡第1次調査で確認された堅穴住居の時期が一致する。集落内やその周辺で消費する土器を焼成していたのであろう。

c. 土坑

S K 75(第3図) S F 73の南側で検出した不整形土坑である。平面規模は東西1.2m、南北1.0mで、深さは0.2mである。出土遺物は土師器がある。S F 73より古いものと考察される。

d. 堀立柱建物

S B 78(第8図) 調査区中央部や北寄りに位置する南北棟側柱建物である。桁行3間、梁行2間で、棟方向はN13°E、平面規模は桁行7.2m、梁行4.8mで、

柱穴は直径0.4~0.5mである。出土遺物は北西隅柱穴の掘方から釘が1本、北辺中央柱穴の柱痕から灰釉陶器が出土した。時期は平安時代と考えられ、S F 76を一部掘り込んでいる。

e. 渕

S D 72(第3・4図) 調査区の西部で検出した南北溝である。幅1.2~1.6m、検出面からの深さ0.5mで、長さは15mを確認した。西側が急傾斜の側壁で深く、東側が比較的緩やかな断面形状となる。出土遺物は土師器・須恵器の他、図示し得ない小片であるが9世紀頃と見られる灰釉陶器があり、平安時代以前の溝と考えられる。また、S F 73の東側を破壊しているため、これよりは新しいものである。

S D 74(第3・4図) 調査区の西部で検出した南北溝である。幅0.7m、検出面からの深さ0.15mで、長さは5mを確認した。出土遺物は混入と思われる古墳時代の土師器がある。調査区西壁の断面観察ではS F 73より新しいことが分かり、S D 72と平行することから同時に2条の溝が道路側溝のように存在していた可能性がある。同様の事例は、江田川遺跡第1次調査のS D 63・S D 54があり、これも平安時代の溝である。

S D 77(第3・4図) 調査区の南部で検出した東西溝である。幅1.1~2.2m、検出面からの深さ0.3mで、長さは8.5mを確認した。出土遺物は古墳時代の土師器・須恵器がある。明瞭な時期は分からずが、S D 72とはほぼ直交する向きであることから、同時期の可能性がある。

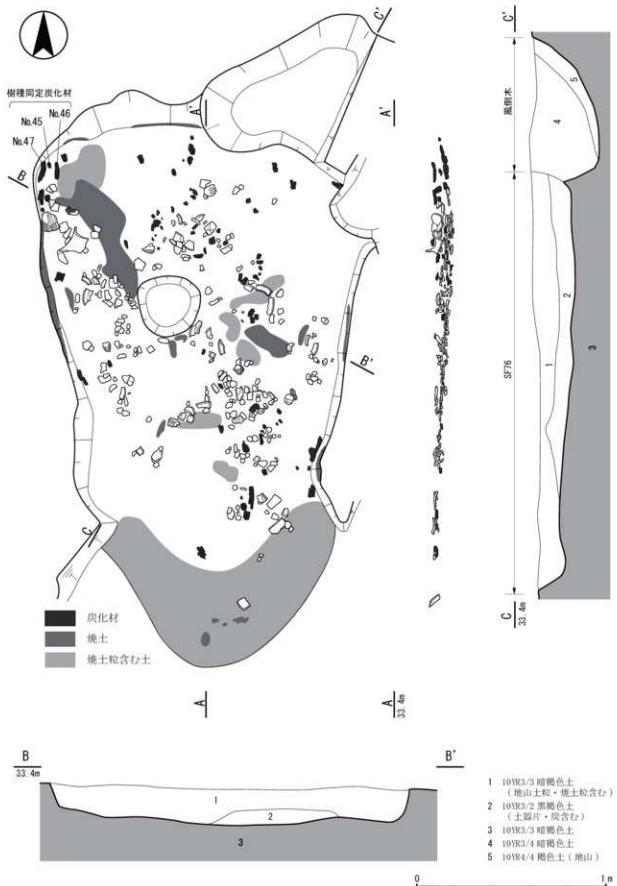
f. ピット

D P 1(第4図) 調査区の南部で検出した不整形のピットである。東西・南北とも0.6mで、検出面からの深さは0.2mである。出土遺物は3点の石材がある。いずれも加工痕があり、何らかの用途に使用されていた石材を、このピットに埋納したものと考えられる。

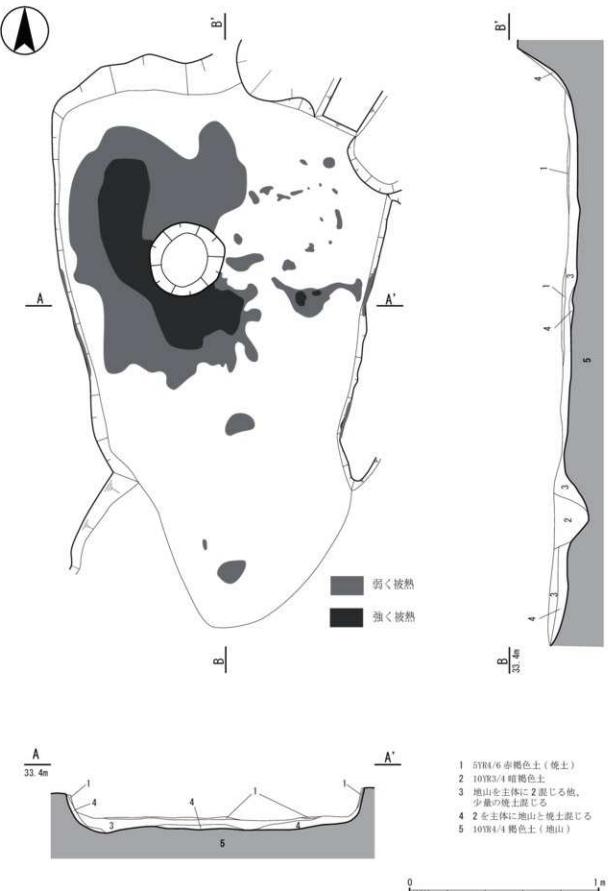
(3) 遺物(第14図)

出土した遺物は土器・陶器・石製品・鐵製品・炭化穀物で、コンテナで15箱、55.5kgである。土器類が最も多く、中でも大部分がS F 76の出土遺物であるが、焼成に失敗して放置されたものであるため完形のものではなく、剥片状の破片が多量に含まれる。

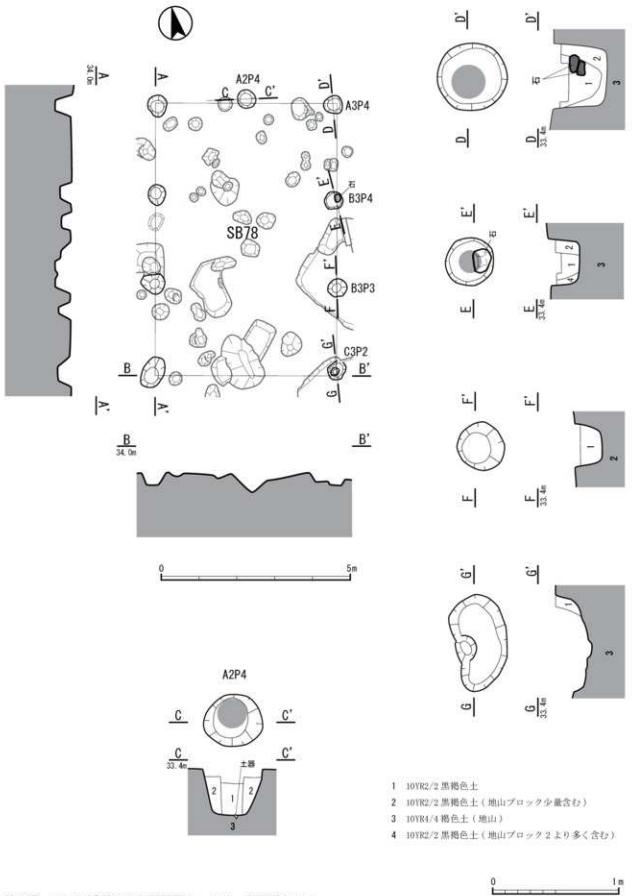
S F 73(1~4) 1は土師器の甕である。現存しないが、恐らく把手がつくものであろう。口縁端部をわずかに内削させて仕上げる。2は土師器の杯である。砂



第6図 江田川遺跡S F 76出土状況図(1:20)



第7図 江田川遺跡S F 76平面図・断面図(1:20)



第8図 江田川遺跡S-B78平面図(1:100)・断面図(1:30)

粒の多い粘土で、外面に粘土層の縫目がある。火葬時に強く被熱している。8世紀末から9世紀代のものであろうか。3は土器器杯で、口縁部をややまみ上げ、ヨコナデで仕上げるが、外面のナデ幅は狭い。11世紀代のものと見られ、上層からの混入品であろう。

4は混入品で、7世紀代の須恵器高脚脚部である。
S-F76(5~8) 5は小型の土器器底である。口縁端部を強く上にまみ上げている。6~8は長頸甕である。本遺構から出土した遺物のうち、焼成中の失敗品と思われるものはこれらの甕のみで、供膳具は見られない。

S-K75(9) 土器器の甕である。表面の剥離が著しいが、形態から7世紀前半のものであろう。

S-B78(10) S-B78の北西隅柱穴の掘方から出土した釘である。ほぼ完形と考えられる。

Pit(11~15) 11はD2P1から出土した加工石のある石材である。素材は湖東流紋岩類で、円形の穴が掘り込まれている。斜削面にしては浅く摩耗も見られないことから、扉以外の機材の台石であろう。12は7世紀前半の須恵器杯である。13は灰釉陶器皿の底部で、折戸53号型式のものである。内底面は使用により摩耗しており、外底面には直切痕である。14は須恵器高脚脚部である。長脚で2方向2段のスカシがある。15はB2P4から出土した平安時代の土器耳皿である。このピットはS-B78の中になることから、この建物と関連があるかもしれない。

3. 川向山添遺跡(第3次)の遺構と遺物

(1) 基本層位

基本層位は、にぶい黄褐色の表土下に褐色の包含層または盛土があり、地山は粘性のある褐色土である。地表から検出面までの深度は東部で概2.0m前後、西部で100cm前後である。

調査の結果、旧地形は南東から南西へ傾斜しており、そこに盛土を行うことで耕作地を造成していたことが分かった。特に南側は盛土が厚く、その下部には暗褐色の旧表土も確認できた。第1次調査時における地元での聞き取りで、本遺跡内では戦前に耕地整理を行い、トロッコを使って削った土砂を移動させたという話があり、恐らくその耕地整理に伴う盛土ではないかと考えられる。

(2) 遺構

検出した遺構は、掘立柱建物・溝・ピットである。

第1次、第2次調査区で多数検出した堅穴住居はない。

a. 掘立柱建物

S-B64(第9図) 調査区南部に位置する東西棟側柱建物である。桁行1間、梁行2間で、今回の調査では北辺の柱穴2個を新たに確認し、建物のプランを確定させることができた。遺物は、北東隅柱穴から7世紀代の須恵器が出土した。遺物や柱穴埋土の状況などから古墳時代後期のものと考えられる。

b. 溝

S-D71(第9図) 調査区南部で検出した溝である。長さ5.0m以上、幅0.2mで、検出面からの深さは0.2mである。南は第2次調査中に伸びる、同じ調査では掘削時にこの溝以下のレベルまで下げていたため検出できていない。出土遺物はなく時期不明である。

(3) 遺物

出土した遺物は土器類・須恵器等の土器類のほか中世陶器があり、コンテナ2枚、2.6kgであるが、ほとんどが小片で図示し得るものは下記の1点のみである。

S-B64(19) 19は須恵器短頸の口縁部である。7世紀のもので、周辺これまでに検出されている堅穴住居や掘立柱建物と同時期である。

4. 横谷遺跡(第2次)の遺構と遺物

(1) 基本層位

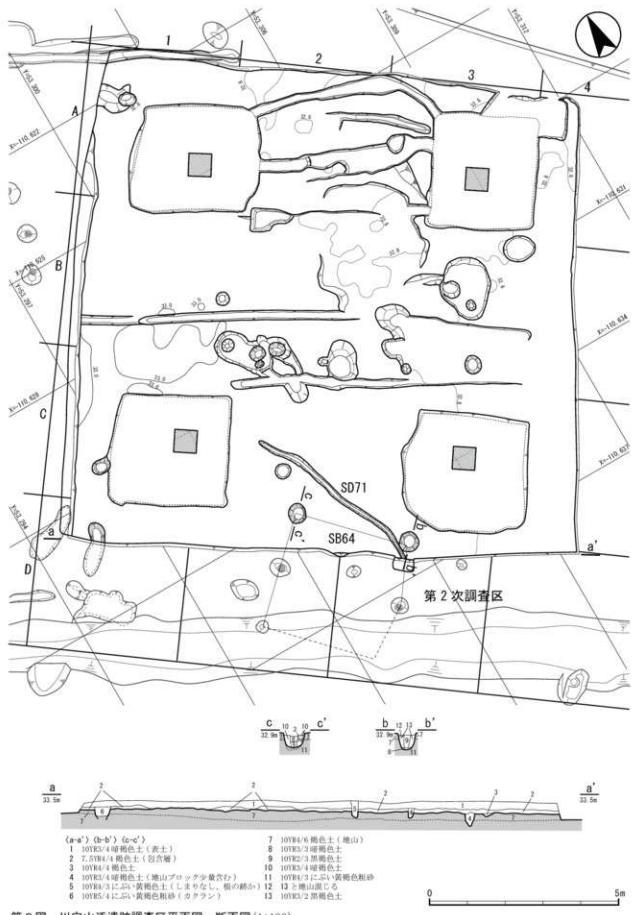
基本層位は、にぶい黄褐色の表土下に褐色の包含層または盛土があり、地山は粘性のある褐色土である。地表から検出面までの深度は東部で概2.0m前後、西部で100cm前後である。

調査の結果、旧地形は南東から南西へ傾斜しており、そこに盛土を行うことで耕作地を造成していたことが分かった。特に南側は盛土が厚く、その下部には暗褐色の旧表土も確認できた。第1次調査時における地元での聞き取りで、本遺跡内では戦前に耕地整理を行い、トロッコを使って削った土砂を移動させたという話があり、恐らくその耕地整理に伴う盛土ではないかと考えられる。

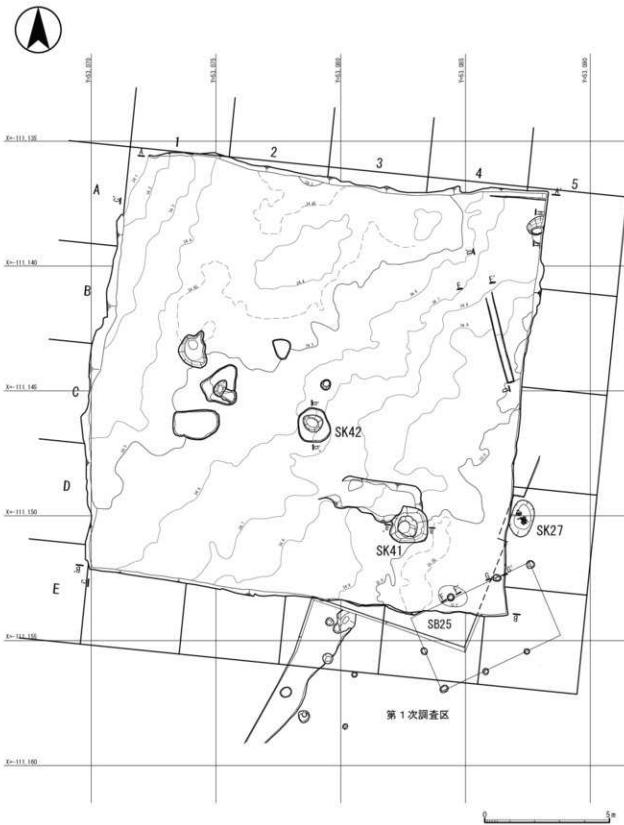
(2) 遺構

a. 掘立柱建物

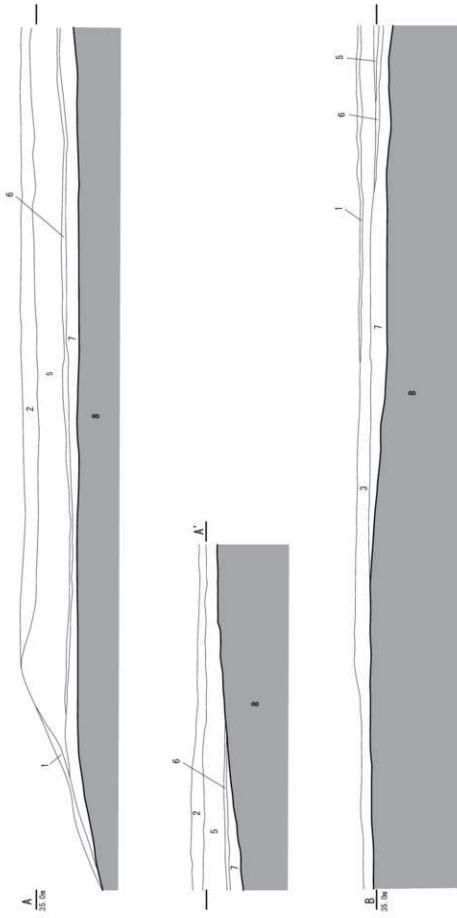
S-B25(第10・13図) 調査区の南東部にある掘立柱建物で、第1次調査で確認していたもの一部を今回新たに検出した。桁行3間、梁行2間で、今回の調査では北辺の柱穴2個を、ほぼ想定通りの位置で確認し



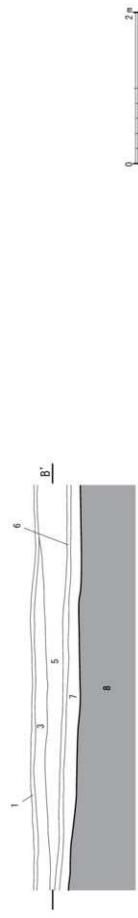
第9図 川向山添遺跡調査区平面図・断面図(1:100)



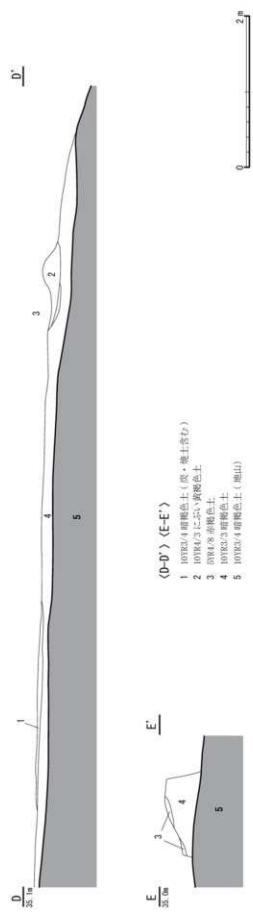
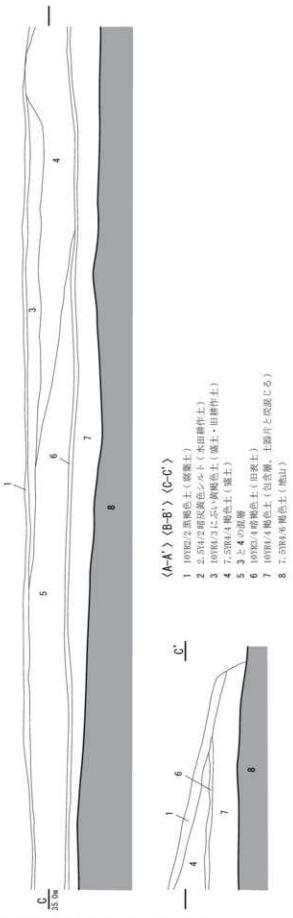
第10図 横谷遺跡調査区平面図(1:150)



第11図 横谷遺跡土層断面図① (1:50)



第12図 横谷遺跡土層断面図② (1:50)



- (A-B') (C-D') (E-E')
- 1 10P2/2 黒褐色土(腐葉土)
 - 2 2.5YR/2稍暗褐色・ベージュ土(木田耕土)
 - 3 10P8/3に近い黄褐色土(腐葉土・田耕土)
 - 4 7.5YR/4の灰褐色土(腐葉土・盛土)
 - 5 3と上の灰褐色土(腐葉土・盛土)
 - 6 10P8/4 姑色土(木田耕、土器片と共に見だる)
 - 7 10P8/4 姑色土(木田耕)
 - 8 7.5YR/4 姑色土(地山)

た。出土遺物はない。

b. 土坑

S K41(第10・13図) 調査区の南端部で検出した不整形土坑である。東西1.5m、南北1.5mで、検出面から約0.3mである。出土遺物はない。

S K42(第10・13図) 調査区の南端部で検出した不整形土坑である。東西1.3m、南北1.3mで、検出面からの深さは約0.3mである。出土遺物は土器がある。

c. その他

調査区の北東部で、包含層が緩やかな谷状に落ち込んでいる状況が認められた。層中には焼土粒を多く含む部分が認められたため、サブレンチを設定して土坑や堅穴住居が存在しないか慎重に判断しつつ掘削を行った。堅穴住居もしくは1次調査で検出されたSK35の延長部分の可能性も想定していたが、掘削の結果、SK35ほどの深さがなく、遺構と認めるほど明瞭な肩部もなかった。また、等高線を見ると調査区北東部に浅い谷状の地形が入り込んでいることがわかる。ことから、自然地形の堆みに不要品を廃棄した場所であったと考えられる。この付近での遺物は、土器のほかチャート剥片が1点ある。

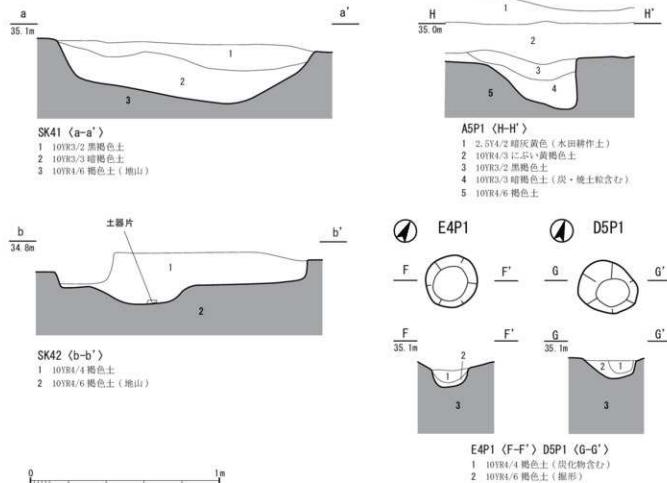
(3) 遺物

出土した遺物は土器器S字状口縁台付甕の口縁部・脚部ならびに土器高杯の脚部、チャート剥片などで、コンテナで1箱、2.0kgであるが、ほとんどが小片で図示し得るものは下記の2点のみである。

包含層(2・21) 20土器器台付甕の脚部で、小型の個体と考えられる。21は土器高杯の脚部である。このほか小片のため図示していないが、土器器S字状口縁台付甕の口縁部や、チャートの剥片が出土している。この遺物の傾向は第1次調査と同様である。

(山本)

註 四日市市教育委員会2022 丹川山脈道路・江田川道路2丁14頁。



第13図 横谷遺跡SK41・SK42・P pit 平面図・断面図(1:20)

IV 結語

(1) 江田川遺跡

調査の結果、平成25年に行った第1次調査で確認した集落の遺構が、さらにはその西側にも広がっていることを確認した。土器焼成坑や火葬穴といった特徴的な遺構を検出し、出土遺物からは、集落の時期がこれまでの調査で判明している7世紀前半頃に加え、平安時代にもあったことが明確になった。

(2) 川向山遺跡

調査の結果、平成28年・30年度に行った第1次・第2次調査で確認した古墳時代後期の集落が、この場所にも広がっていたことが確認できた。しかし、周辺で多数確認している堅穴住居はなく、これまでの調査結果と合わせると今回調査区以南に住居が集密する状況が明らかとなかった。

(3) 横谷遺跡

調査の結果、平成29年に行った第1次調査で確認した古墳時代前期の集落の範囲が、丘陵の西側にも広がっていたことが確認できた。ただし、主に検出されたのは土坑で、堅穴住居などは見られなかつたことや、全体に西へ傾斜している地形であることから、居住城ではなく廃棄土坑などが設けられた集落縁辺部に当たる場所と考えられる。

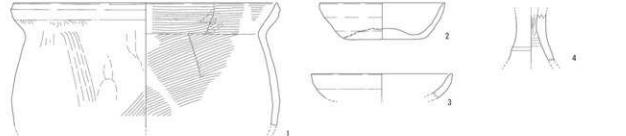
(山本)

出土遺物	採取位置	採取位置番号	検出面積(出土面積)	埋蔵	埋蔵深度	出土深度(0)	出土深度(1)	出土深度(2)	調査方法の特徴	出土	出土量	名前(1)	名前(2)	備考	
江田川遺跡	1	II-4	0	SF7	土耕層	無	27.8	—	内-ヨリナガ、ハケモのちオサニ	無	無	II-3M(7.0)	II-2M		
江田川遺跡	2	II-2	0	SF7 No.1	土耕層	無	13.1	—	3.8	内-ヨリナガ	無	II-3M(5.0)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	3	II-2	0	SF7	土耕層	無	14.7	—	内-ヨリナガ、オサニ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	4	II-1	0	SF7	淡耕層	無	12.7	—	内-ヨリナガ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	5	II-1	0	SF7	土耕層	無	12.7	16	内-ヨリナガ、ハカミ、ケズリ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	6	II-1	0	SF7 No.2	土耕層	無	17	—	内-ヨリナガ、ハクタ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	7	II-2	0	SF7	土耕層	無	20	—	内-ヨリナガ、ハクタ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	8	II-2	0	SF7	II-23-24-40 II-25-26-37-38-39-40 II-27-28-31-32-33-34-35-36-37-38-39-40	土耕層	無	18	—	内-ヨリナガ、ハクタ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0
江田川遺跡	9	II-2	0	SF7	土耕層	無	15	—	内-ヨリナガ、ハクタ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	10	II-2	0	SF7 No.2	淡耕層	無	15	—	内-ヨリナガ、ハクタ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	11	II-1	0	PI No.2	石製品	不明	最大幅 33.7	0.0	内-ヨリナガ、ハクタ	無	無	II-3M(4)	II-4M(4)	0.0	
江田川遺跡	12	II-2	0	AJ-76	淡耕層	無	11.4	最大幅 33.7	内-ヨリナガ	無	無	II-3M(1)	II-4M(1)	0.0	
江田川遺跡	13	II-2	0	PI	淡耕層	無	—	3.1	内-ヨリナガ	無	無	II-3M(1)	II-4M(1)	0.0	
江田川遺跡	14	II-2	0	PJ	淡耕層	無	—	—	内-ヨリナガ、淡耕	無	無	II-3M(1)	II-4M(1)	0.0	
江田川遺跡	15	II-1	0	PJ-104A	淡耕層	無	7.5	4.9	内-ヨリナガ、ハクタ	無	無	II-3M(0.4)	II-4M(0.4)	0.0	
江田川遺跡	16	II-1	0	PJ-104B	淡耕層	無	10.7	3.7	内-ヨリナガ、ハクタ	無	無	II-3M(0.4)	II-4M(0.4)	0.0	
江田川遺跡	17	II-1	0	PJ-104C	淡耕層	無	13.8	—	内-ヨリナガ	無	無	II-3M(0.4)	II-4M(0.4)	—	
江田川遺跡	18	II-1	0	PJ-104D	淡耕層	無	—	9.4	内-ヨリナガ、粘土質白	無	無	II-3M(0.4)	II-4M(0.4)	—	
江田川遺跡	19	II-1	0	PJ-104A	淡耕層	無	10.7	—	内-ヨリナガ	無	無	II-3M(0.4)	II-4M(0.4)	—	
江田川遺跡	20	II-1	0	PJ-104E	淡耕層	無	—	3.8	内-ヨリナガ	無	無	II-3M(0.4)	II-4M(0.4)	—	
江田川遺跡	21	II-1	0	PJ-104F	淡耕層	無	—	—	内-ヨリナガ	無	無	II-3M(0.4)	II-4M(0.4)	—	

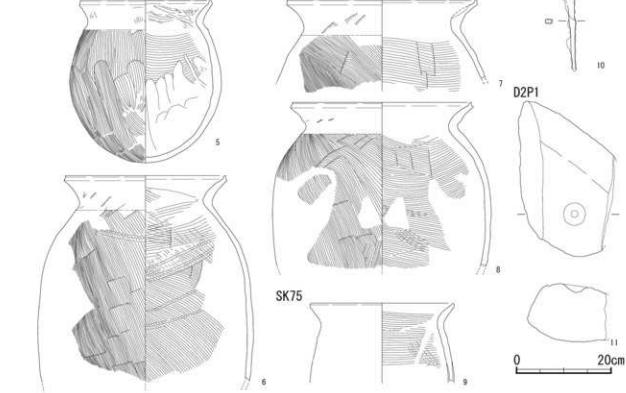
第2表 遺物観察表

江田川遺跡第3次

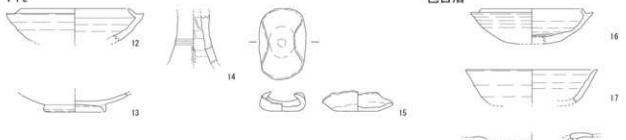
SF73



SF76



Pit



川向山添遺跡第3次

S864



第14図 遺物実測図(1:4, 11のみ1:8)

四日市市江田川遺跡出土炭化材の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所

1. 試料

試料は四日市市江田川遺跡の土器師焼成坑SF76から出土した炭化材3点である。

2. 觀察方法

試料の炭化材から数mm四方の破片を採取してエボキシ樹脂に包埋し、木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片の薄片プレバートを作製した。このプレバートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(広葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ブナ科シイ属(*Castanopsis* sp.)

(遺物No. 45, 46, 47)(写真No. 45, 46, 47)

環孔性放射孔材である。木口では孔圈部の道管(~300 μm)は単独でかつ大きいが接線方向には連続していない。孔圈外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は單穿孔と多数の有縫壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間隔壁孔には大型の槽状の壁孔がある。板目では多数の單列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイを見られる集合・複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は

本州(福島、佐渡以南)、四国、九州、琉球に分布する。

◆参考文献◆

林 勝三「日本木材断面鑑定写真集」京都大学木質科学研究所(1991)

高橋 優・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品研究」雄山閣出版(1980)

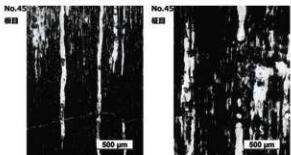
杉村四郎・村田 順「原色日本植物鑑定本編I・II」 萌芽社(1979)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料部27種 木器集(木器類・若葉古代篇)」(1985)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料部36種 木器集(木器類・若葉近世篇)」(1990)

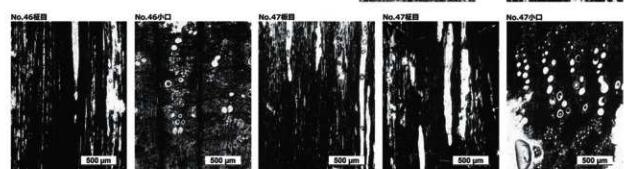
◆使用顕微鏡◆

Nikon Lab-F1



四日市市江田川遺跡出土炭化材同定表

No.	遺構・層位	品名	樹種
45	SF76 No.45	炭化材	ブナ科シイ属
46	SF76 No.46	炭化材	ブナ科シイ属
47	SF76 No.47	炭化材	ブナ科シイ属



図版 1



江田川遺跡 S F 73完堀状況(東から)



江田川遺跡 S F 73遺物出土状況(東から)

図版 2



江田川遺跡 S F 76(東から)



江田川遺跡 S F 76遺物出土状況(南から)

図版 3



江田川遺跡 S D78(南から)



江田川遺跡 S D72(北から)

図版 4



川向山添遺跡調査区全景(南西から)

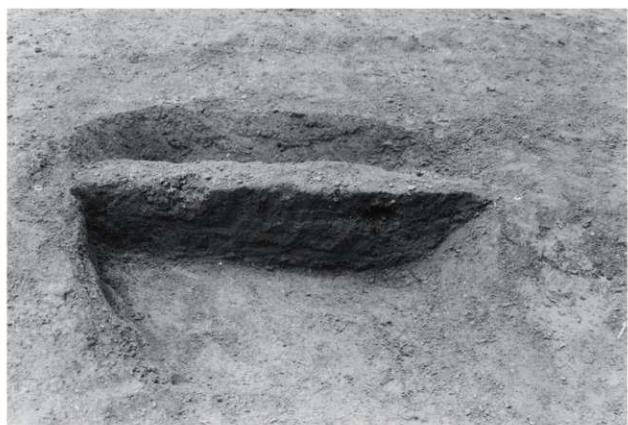


川向山添遺跡 S D71・S B64(北から)

図版5

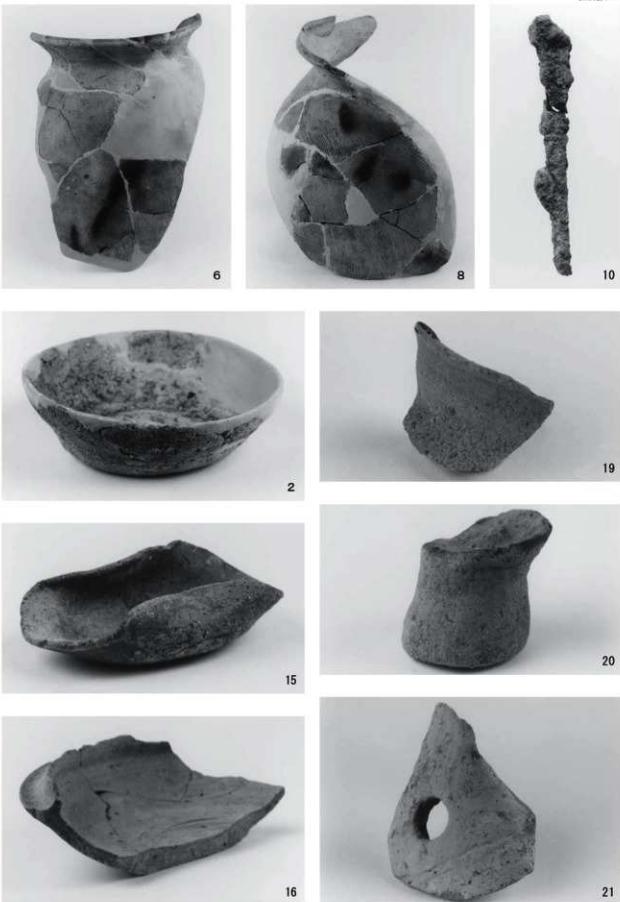


横谷遺跡調査区全景(北東から)



横谷遺跡S-K41(南から)

図版6



報告書抄録

ふりがな	そ う で て う と う け ん せ つ に と も な う ま い ぞ う ぶ ん か ざ い は っ く つ ち ょ う さ は う こ く え だ が な は せ き 3・か わ む か い や ま ざ え い せ き 2・よ こ だ に い せ き 2						
書名	送電鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 江田川遺跡3・川向山添遺跡2・横谷遺跡2						
シリーズ名	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	58						
編著者名	山本達也・川崎志乃						
編集機関	四日市市教育委員会						
所在地	〒510-8601 三重県四日市市諏訪町1番5号 TEL059-354-8240						
発行年月日	2022(令和4)年3月31日						
所取遺跡名	所取遺跡所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
江田川遺跡	四日市市 西坂部町	24202	259	35° 00' 00" 35° 00'	136° 00"	20190509～ 20190607 (第3次調査)	送電鉄塔建設
川向山添遺跡	四日市市 西坂部町	24202	347	35° 00' 07" 35° 05"	136° 05"	20200525～ 20200603 (第3次調査)	
横谷遺跡	四日市市 西坂部町	24202	120	34° 59' 47" 34° 45"	136° 45"	20190716～ 20190806 (第2次調査)	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
江田川遺跡	集落跡	古墳・ 平安	掘立柱建 物・土坑・ 溝・ビット	土師器・須恵器 灰釉陶器・鉄釘	古墳時代の土師器焼成土坑1基、平安時代の火 葬穴1基、掘立柱建物を1棟などを検出した。		
川向山添遺跡	集落跡	古墳	掘立柱建 物・溝・ ビット	土師器・須恵器	これまでの調査結果と合わせ、集落の居住域の 範囲がより明確になった。		
横谷遺跡	集落跡	縄文・ 古墳	掘立柱建 物・土坑・ 溝	土師器・須恵器 陶器	第1次調査で確認した古墳時代前期の集落の縁 部を調査した。		
要約	江田川遺跡では、平成25年に行った第1次調査で確認した集落の遺構が、さらにその西側にも広がっていることを確認し、集落の時期がこれまでの調査で判明している7世紀前半頃に加え、平安時代にもあったことが明確になった。 川向山添遺跡では、平成29年・30年に実行した第1次・第2次調査で確認した古墳時代後期の集落が、この場所にも広がっていたことが確認できた。これまでの調査結果と合わせると今回調査区以南に住居が集められた状況が明らかになった。 横谷遺跡では、調査の結果、平成29年に実行した第1次調査で確認した古墳時代前期の集落の範囲が、丘陵の西側にも広がっていたことが確認できた。ただし、主に検出されたのは土坑で、堅穴住居などが見られなかったことや、全体に西へ傾斜している地形であることから、居住域ではなく廐室土坑などが設けられた集落縁辺部に当たる場所と考えられる。						

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書58
**江田川遺跡3・川向山添遺跡2
 •横谷遺跡2**

2022(令和4)年3月31日
 編集発行 四日市市教育委員会

P D F 作成 : 2022(令和4)年3月31日
 作成者名 岛山印刷